臥雲辰致（がうんたつち）

発明益世、其業大慈
－日本独創の技術・ガラ紡－

臥雲辰致（1842 ～ 1900）
肖像画：臥雲弘安蔵

臥雲辰致は、1842年（天保13年）信濃国安曇郡小田多井村（現・長野県安曇野市堀金）の横山家の次男として誕生した。幼名は「横山栄弥」といい、父は横山儀十郎、母はなみである。家業は、農業兼足袋底の問屋であった。

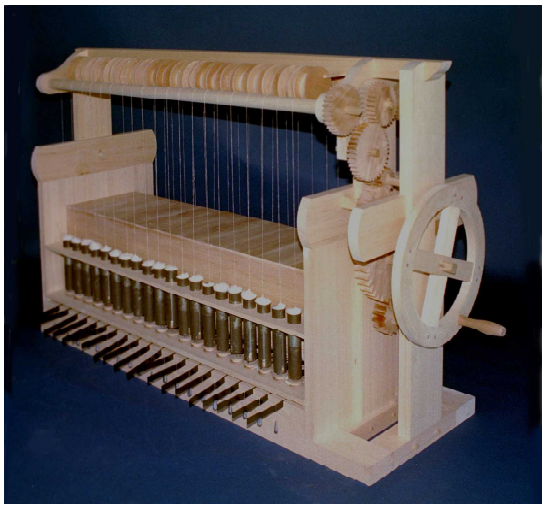
1861（文久元）年、家業と関連の糸つむぎから綿糸紡績機の発明に熱中したので、近くの安楽寺に弟子入りさせられ、「智栄」と名乗った。1867（慶応3）年臥雲山孤峰院の住持（26歳）となるも、明治初めの廃仏毀釈で廃寺を機に還俗し、「臥雲辰致」と改名した。

■明治十年内国勧業博覧会で第一位となった綿紡機

臥雲辰致は還俗後、1875（明治8）年、東筑摩郡波多村（現・長野県松本市波田）の川澄家に田畑、山林の測量で逗留。この間も、綿糸紡績機の改良に努力する。松本開産社内の連綿社で綿紡機の製造を始めた。

1877（明治10）年10月、明治十年内国勧業博覧会に綿紡機（後のガラ紡績機、「ガラ紡」と略）を出品、第一位の鳳紋褒賞を受賞する。これを契機に、ガラ紡を知る者が国内に多数現れた。臥雲のガラ紡は機構が簡単で製造し易く、特許制度も未整備だったこともあり、模倣品が各地で製造販売され、臥雲自身は経済的には恵まれなかった。

1881（明治14）年の第二回内国勧業博覧会に改良した紡績機を出品し進歩二等賞を受賞するも、洋式紡績の糸質同様の向上を求められ、改良機は普及することはなかった。



内国勧業博覧会で「鳳紋褒賞」を受賞した綿紡機
写真：安城市歴史博物館所蔵の「綿紡機」復元機

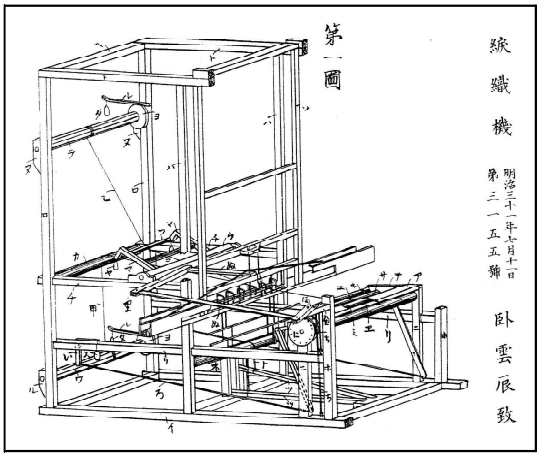
■三河、矢作川流域で普及したガラ紡

1877（明治10）年の内国勧業博覧会で高評を得た臥雲のガラ紡は、綿業の盛んな三河にいち早く伝えられた。同年12月、三河、西尾の宮島清蔵がガラ紡機を購入、額田郡常盤村滝（現・岡崎市滝町）で野村茂平次方の水車を借りて紡績を始めた。水車紡績の始まりであった。以後、矢作川の各支流一帯には水車紡績の工場が軒を連ね、最盛期の1939年には、百万錘を超えるガラ紡の設備があった。

一方、幡豆郡横須賀村の鈴木六三郎は、1877年に臥雲からガラ紡の技術指導を受け、翌1878年に矢作川で船紡績を始めている。この船紡績、明治末期には100艘余の機械船が矢作川に浮かんでいた。

1921（大正10）年、三河紡績同業組合は、岡崎市朝日町の朝日公園内に臥雲辰致記念碑を建立した。題額には、「澤永存」（「偉人の恩沢永遠に」の意）、そして碑文には、「発明益世　其業大慈」と臥雲のガラ紡績機発明の功績を讃えている。

1961（昭和36）年、岡崎市制四十五周年の際、臥雲辰致は岡崎市の名誉市民に推挙されている。



綟織機（蚕網織機）の特許の図

■蚕網織機（綟織機）の発明

臥雲辰致は、1890（明治23）年7月、外国式の織機を応用した蚕網織機を発明し、第三回内国勧業博覧会に出品、三等有功賞を受賞する。臥雲の蚕網織機は、経糸の綟の間に横糸を通したこまかい目の網を織る綟織機（綟網織機）であった。細かい目の蚕網は養蚕に適していたため、博覧会で賞を得たこととも相俟って、蚕網織機を独占的に製造販売することが出来、臥雲はようやく貧しい生活から抜け出すことが出来たのであった。

（臥雲弘安）